

寸 胴

THE GIFU UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

第14号 1994.10

目 次

「図書館機能の強化・高度化」に向けて	渡邊 正人 …………… 1	『24人のビリー・ミリガン』	中村 勝人 …………… 6
図書館嫌いの無理難題	宮崎 青爾 …………… 3	一飛散した人格達が訴えているなにかー	
館蔵資料紹介 No.5		学内LANを利用したMEDLINEへの研究室からの	
繊維工学の貴重本	上西 純泰 …………… 4	接続と利用方法	広瀬 健二・江崎 孝行 …… 7
教官推薦図書		図書館員から一言	岡田 則子 …………… 8
『NHKスペシャル チベット死者の書』		波多江貴子 …………… 8	
中井 幹 …………… 6		お知らせ …………… 8	

「図書館機能の強化・高度化」に向けて

渡 邊 正 人

『寸胴』第13号で紹介された附属図書館事務部課制の正式発足に当たり、岐阜大学附属図書館が本学の研究・教育並びに学習を支援し、的確に機能するよう、館長を中心に職員のチームワークを大切にし、さらに他部局とのコミュニケーションを図りながら、その実現に向け努力すべく決意を新たにしたところです。

さて、平成4年7月の学術審議会答申「21世紀を展望した学術研究の総合的推進方策について」を受けて、学術審議会学術情報資料分科学術情報部会で大学図書館等の機能強化について審議されていたところですが、平成5年12月には「大学図書館の強化・高度化の推進について」(報告)が出されました。今後、大学図書館の取組むべき方向が示されたものとなっています。

その中で、行政的な対応が必要なもの、各大学が努力しあるいは相互に協力しながら取組むべきもの、さらには大学図書館関係者が対処していくべきもの、また、現状への重点的対応と中・長期的な視点に立った対応などの課題が多岐にわたって提起されています。

大学図書館は、大学における学術研究・教育を支える基盤であり、また学術情報システムの主要な構成機関として、大学図書館の学内及び学外との連携協力、ネットワークと電子化情報の活用、新しいニーズへの対応などの観点から、広範な情報資源の有効利用を進めるための機能を強化・高度化していくことが求められています。

本学においても、この「大学図書館機能の強化・高度化の推進について」の趣旨に添った改善に向け努力しなければならないことは申すまでもありません。

これらを踏まえて、本学図書館の現状を紹介し、また当面する課題について考えてみたいと思います。

まず、前年度全国的に整備が進められた学内LANは、本学においても実現しました。これと同時に、図書館では各方面のご支援によりCD-ROMサーバを導入することができ、学内LANを経由して研究室等の端末からMEDLINEの情報検索が可能となりました。医学部を中心に関連研究分野からの利用は多く、好評を得ています。電子化図書館に向けて新たな一歩を踏み出すことができ

ました。今後は他の分野のソフトの充実とその恒常的な財源確保が大きな課題となっています。

また、学術情報システムの機能強化の面で、情報処理センターには従来から全面的な支援をいただいておりますが、来年度予定されている図書館システム用電算機のリブレースにあたっては、情報処理センターの協力を得ながら一層のレベルアップを図りたいと考えています。もちろん、図書館としてはOPACのデータベース構築等への協力を今後とも進めて参ります。

大学図書館は学習活動の場として、その充実も極めて重要であります。大学改革にともなう社会人を大幅に受入れた夜間主コースの設置、政策としての10万人受入目標による外国人留学生の増加、生涯学習への意欲の高まりに対応した地域社会・市民への図書館開放等の新しい諸情勢に応える一環として、このたび本館では開館時間を月曜日については2時間延長して22時までとし、土曜日は本館・分館とも1時間延長すると同時に、希望の多い午後に開館することとしました。さらに、土曜日にも平日と同様に貸出・返却とOPACの検索を可能とし、サービスの改善を実施しました。一層の利用を期待しています。利用者のニーズは今後ますます多様化することと思われませんが、従来からの学術情報センターを核としたネットワークはもとより、岐阜県下各大学図書館、来年オープンする県立の新図書館等との協力関係も密にして、地域に開かれた大学図書館としての役割も大いに果たしていきたいと考えています。

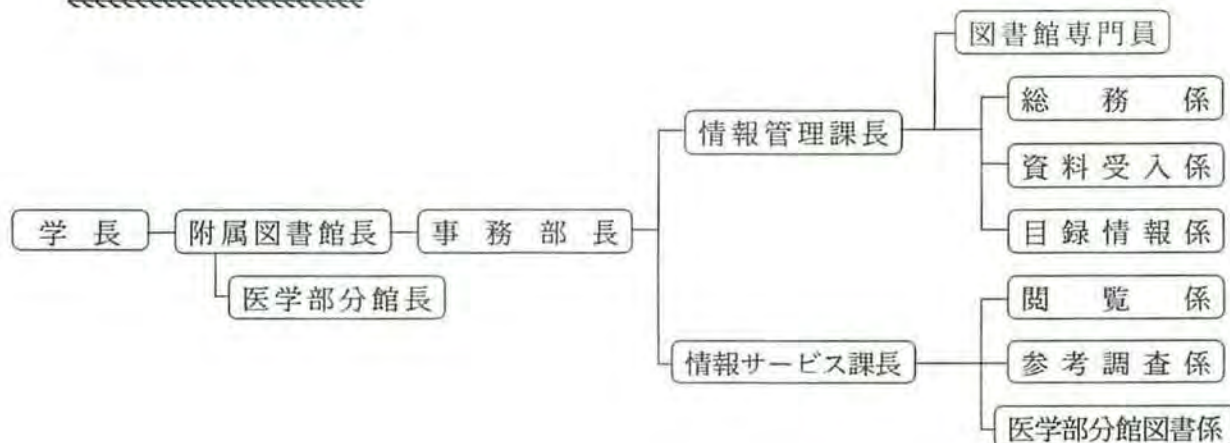
ところで、大学が統合移転して12年、大学の発展とともに図書館資料も大幅に増加し、既に図書館の収蔵可能冊数を遥かにオーバーしてしまいました。数年来書庫を中心とした増築を概算要求しているところです。平成7年度には是非この増築が実現してほしいものと願っています。これによって、学術情報の提供を迅速化すると同時に、収蔵スペースの不足を研究室等への貸出して補っている現状を是正し、図書館での共同利用による資料の活用を図っていききたいと考えています。併せて資料保存のための環境改善も実現させたいものです。

この他にも様々な課題がございますが、図書館機能の強化・高度化を進めるために図書館職員は全力をあげて努力を重ねて参りますので、全学のご理解とご支援をお願いする次第です。

(わたなべ まさと：附属図書館事務部長)



組織図



図書館嫌いの無理難題

宮崎青爾

図書館嫌い……などと表題を付けてしまい誤解を招くかもしれないが、私も小学生のころから色々な形で図書館を利用させてもらってきたし、図書館の重要性については百も承知のつもりである。にも拘わらず、図書館にはどうも素直に気を許せない、どこか身構えてしまう何かがあるのに気付く。

図書館に関する最初の思い出は、小学校4、5年にさかのぼる。当時私は愛知県の海辺の小さな町に住んでいたが、傾き加減の旧役場の一部が改造されて蔵書が二・三千冊程の図書館が造られることになった。図書館が出来た最初の頃から、書庫の薄暗い湿った感じやカビや埃の臭い、図書館の醸し出すあの妙に気取った静寂と言ったものが私には生理的に合わず、図書館通いはあまり好きではなかった。それでも、四季を通じて図書館を利用していたはずなのに、何故か真夏の、耳をつんざくほどの蟬の喧騒のなかで本を読んだ記憶が鮮明に残っている。夏の図書館には静けさへの気遣いは不要だったので、たとえ蚊に刺されても窓を閉める季節より好きだった。

小学校の高学年から中学生のころは、図書館では、芥川龍之介、二葉亭四迷、樋口一葉などを読んでいたが、とくに樋口一葉の文章の響きや律動感が好きで、内容の理解はそっちのけで、他の人には聞こえないように離れて席をとり、注意深く小声を出して読んでいた。

中学校に通い始めたころになっても、図書館の静けさとそれを強要される（と私には思えた）雰囲気にはどうも馴染めず、いつのまにか図書館から遠ざかるようになっていった。図書館に行っても、目的の本だけ借りて出てきてしまうようになった。そして、次第に、本は自分の持ち物として購入して読むものと考えようになってしまった。恐らくこの頃からだとおもうが、本に線や文字の書き込みをするようになった。こうなると、本を借りづらくなってしまった。

馴染めずにいた図書館通いに、楽しみがなかったわけではない。何年間も埃をかぶっていた家の書架に、外国文学全集を見つけ、読むことにしたのは良かったが、「ボヴァリー夫人」などではやたらと伏せ字が出てきて、妙に興味をそそられた。これこそはと覗んだ箇所を筆記し、図書館へ駆けつけたものだ。最初から伏せ字のない図書館の本を読めばいいのに、何回となく、抜き書きした紙を握りしめては図書館通いをした。

高校時代は、図書館を勉強部屋代わりにしている者も

いたが、私には考えられないことだった。医学部に通う前の4年間は文学部に籍を置いていたので、やむなく図書館通いもした。図書館嫌いは相変わらずだった。医学部の学生時代には、頻繁に医学部図書館のお世話になった。図書館と言っても、木造のガタビンで、人が通ると靴音がにぎやかに響き、床が揺れて激しく鳴るような古さだった。この環境は私にとっては快適であった。暇なときに写真誌や月刊誌などを、壊れかけのソファで読むといった気軽な読書だった。医者になってからは、専門の雑誌のコピーなどでお世話になることとなり、現在もお世話になっている。

子供のときに出来てしまった図書館に対する心理的なイメージは消し難く、図書館の中で読書をするのがいまだに苦手である。特に最近では、この10年来悪化の一途をたどっている我が花粉症が、私をますます図書館から遠ざけている。花粉症の時期には杉花粉にだけでなく、埃やカビに過敏となり、図書館の室内空間はすべて、特に書庫にはほとんど近づくことすらできない。最近では、過敏症は春先だけでなく、通年となった。やむなく図書館へ行く場合はちり紙とハンカチは必携である。

私にとって、図書館はますます遠い存在となりつつあるが、何とか図書館好きになる方法はないものか勝手に考えてみた。私個人で出来るのは、1)何とかして花粉症を直すか、せめて図書館の空気に耐えられる程度に改善を図ること、2)図書館に入る時には産業用の防塵（微）マスクを持参すること（出来れば、図書館の入り口に常備していただく）くらいだろう。図書館にお願いすることは、まずは、静かな環境は出来るだけ排すべく、1)靴ばきのまま入館でき、床は出来るだけよくきしむ板張りにすること（敷物のカビも防止できる）、2)年間を通じて、季節の鳥や虫の声、いっそのこと、季節を無視して蟬の声をテープで全館に流すこと。3)伏せ字の文学書コーナーを設けること。4)閲覧室には古いソファを置くか、畳を敷き、枕の持参を許す。最後に、5)書籍をすべて排し、防霉処理を施したマイクロフィルム、ビデオ、CD-ROMなどを利用した保管法に切り替え、さらには、家のパソコンでこれらを利用できるようにする。すでにこの流れの芽生えはあると思うが、期待している。以上、やはり無理難題だろうか。

（みやざき せいじ：医療技術短期大学教授）

館蔵資料紹介 No.5

繊維工学の貴重本

上 西 純 泰

旧繊維工学科の図書の内14冊は資料として保存したほうが良いと、関係者は考えてまいりました。

さて先日、図書館長よりこの原稿のご依頼がありまして、なぜ小生なのか質問申しましたところ、館報編集委員会では図書館専門員のご発言が皮切りになって、ついにその委員会で決まってしまったという事の次第を図書館長より伺い知ることができました。図書館専門員は前記14冊の存在を前からご存じのようでありました。

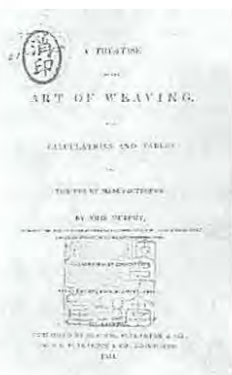
意によりまして、それでは前記14冊を代表するところのMurphyとPosseltの著書を次の(1)および(2)の要領で順次紹介いたします。

(1) J. Murphyの本は繊維関係の在庫図書中一番古いものでありまして、“手ばた”による装飾織物(fancy-cloth)の製織法および各種の“手ばた”が論述されております。また、この本の序文は、Scotlandの織物工業史になっております。ここではこの工業史に注目して、その抜粋を以下に紹介いたします。

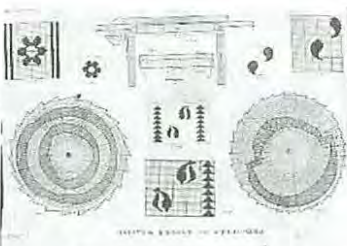


(写真1)

(2) 装飾織物が“手ばた”で織られるのは特殊な場合であって、通常ジャカード織機に掛けられます。さて、このジャカード織機の開発事情が分かる本は、現在では少数しか残っていないと思われる。幸いなことに、本学ではDonatの本^(註1)とPosseltの本とがあります。開発事情紹介のため、ここではPosseltの本を採り上げます。

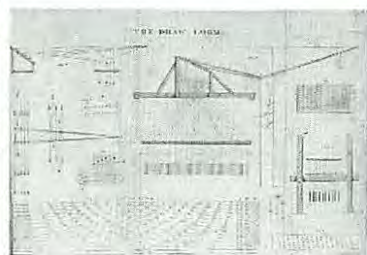


(写真2)



(写真3)

1. A treatise on the Art of Weaving, with Calculations and Tables for the Use of Manufacturers. John Murphy. Glasgow (1831). (分類586.7 著者Mu-78 登録番号E3210). (写真2).



(写真4)

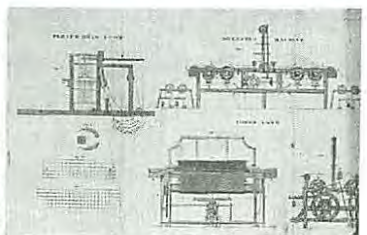
この本は装飾織物の製織の実際を詳細に論述しております(写真3, 5)。Draw loom, Cross' machine, French draw loomなどの図版(写真4, 6)は、いよいよ貴重であります。復原用原図またはそのほかといたしまして。



(写真5)

以下の列記はPrefaceで述べられているScotlandの織物工業史からの抜粋であります。

○製織技術の最古の文献は出エジプト記(Exodus)でのユダヤ人の製織技術(Weaving arts)のようであります。



(写真6)

○インドの原住民が1830年ごろ行なっていた製織法(写真1)は古代ギリシャ人、古代ローマ人の製織法と大差ないものであろうと推論されております。

○ローマ人はBritainを占領して足場を固めたのち、Winchesterに紡毛工場を建てて軍隊の衣服をつくり、その後原住民にも製織技術およびflax(亜麻)の栽培を教えたようであります。

○14世紀初頭、Edward III時代に広はば紡毛地が輸入され、のちにそれが英国の主要産品となったようであります。

○かいこ(silk worm)は1608年にEnglandへもたらされ、広はば絹織物の初生産は1620年のようであります。

(註) I. Chapter VII, sect. III. Paper spots, Japan spot or Brocadesで日本の錦襦, 錦が論じられております。

II. 単語で, 今のtwillは昔tweelのようであります。

III. Theory and Practice of Damask Weaving.

H. Kinger & K. Walter.

D. D. Van Nostrand Co., (1903).

(分類586・74 著者 K i - 48 登録番号E3186) は, J. Murphyの本に関連した貴重本であります。

2. Posselt's Textile Library, Vol. IV. New and Revised Edition of The Jacquard Machine.

E. A. Posselt. Philadelphia (発行年代不明).

(分類 586・77 著者P-84 登録番号E3207) (写真8).

Jacquard machine(ジャカード)は, たて糸の本数が多い織物で, hook ('引っ掛けて引っ張るための' かぎ) とleash (引き綱) によって全部のたて糸を一本一本もち上げて, filling (よこ糸) と交錯できるようにする機械 (写真10) があります。

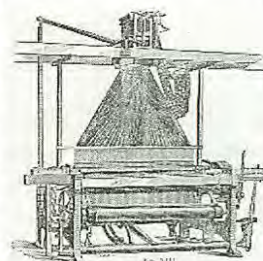
この本は3版がでたあとの新改訂版で, 内容の主体はジャカードの構造であります。ジャカードの (写真7) 歴史のところにこの機械の開発事情が紹介されておりますので, 以下で, その開発事情を抜粋・紹介いたします。

Jacquard machine (ジャカード) はJoseph Marie Jacquard (1752年7月7日, Lyons生まれ) の名を取って付けられた機械であります。

J. M. Jacquardの両親は絹織物製造に従事しておりました。彼, J. M. Jacquardが最初に習った職業は製本業でした。彼が20才の時, 父は小さな家と手ばたを残して死にました。この頃から彼は製織工程中に種々の改良点を見付ける研究を行いましたが成功しないで負債だけが溜まってしまい, とうとう自分と家族の生計を立てなければならなくなりました。石こうの石切り場を始めとして職をつぎつぎ鞍替えして行ったようであります。



1792年 (40才) にはフランス革命軍 (Revolutionist) に加わり, その翌年帰還してからは, 息子と一緒に協会軍 (the Army of the Convention) の攻撃に対抗するところのLyonsの守備隊に加わりました。しかし息子が戦死してしまったので守備隊を離れました。そのころ, リオン協議会 (Lyons Council) は美術宮殿に製織技術改良研究用の場所を提供してくれました, 無料で学生を指導することだけを条件にして, J. M. Jacquardがそこにいた時, ロンドンの技術協会 (the Society of Arts, in London) は漁網製造機について報償金を申し出てまいりました。彼はその機械を完成させたが, さらに義



(写真10)

務として護衛つきでパリーへ行き, 管理委員の前で機械の説明をしなければならませんでした。1804年2月2日にJ. M. Jacquardはロンドン協会 (the London Society) から3000フランと金メダルを頂き, さらにパリーの技術管理委員の就任契約も頂きました。この時点で彼は自分の織機を改良するのに絶好の機会を得ました。彼の改良方法は, Bouchon, Falcon,そしてVancansonのやや古い発明を調査, 改良するという方法でありました。1804年にJ. M. JacquardはLyonsで自分の織機を完成させました。彼は熟練工であったので, 形式とか種類が異なっている別々の織機から, まず注目すべき部分を取り出しておいで, 次に部分と部分を結合させて一台の織機を完成させました。これが彼の発明手法でもありました。1806年, 彼はNapoleon Buonaparteから3000フランの年金を頂いたが, 発明の所有権は取り上げられてLyons市へ移されてしまいました。彼の織機は理解されないまま, 1810年には曲解が反感を呼ぶことになって, 生命の安全のため彼はLyons市を離れました。また, 織機は公開の場所で分解されてしまいました。しかし, 彼の織機は偉大な価値を持っていることが分かってきまして, 織機がこわされたかつての場所には, J. M. Jacquardの彫像 (写真9) が立てられています。J. M. Jacquardは1834年8月7日Lyons市に近いQuillinsで, 82才で死にました。彼が死んだ時30, 000台のJacquard machineが故郷の市で稼働していたとあります。

(註) IV. 以下は在庫している関連貴重本であります。

Technologie der Jacquard-Weberei. von Franz Donat, (1902).

(分類0586077 著者D-84 総番号E1343)

V. Murphyが本を出版した時にはJacquard Machineは発明されていた, しかしJacquard Machineの解説がない。"手ばた"を主体にしたからであろうか。

(うえにし すみやす: 元工学部助教授)

教官推薦図書

教官から、その専門分野を専攻しようとする学生に先ず薦めたい入門書・基本図書、あるいは、より多くの教官・学生に教養書として是非一読を薦めたい図書を紹介していただいています。

『NHKスペシャル チベット死者の書』 (河邑厚徳・林 由香里 著 NHK出版)

中 井 幹

科学的医療では個人の死は単に身体的変化であり、精神の終末であり『死は無であり、臨床医学の関与するところではない』としか定義しない。臨死体験でさえ、まだ臨床医学では認めてはいない。しかし、これも単に生きて戻った者で、死そのものとは認めてはいない。

個人にとっての死はC・G・ユング(チベットの死者の書の心理学)や河合隼雄(生きることと死ぬこと)など精神医学者の一部の人やその他の著者(養老孟司:生と死の解剖学)が見られるくらいである。

医学教育では、死に関する部分はかなり省略されている。身体的な死の変化は、もちろん教える。しかし、死に至る病に侵された患者の心への配慮は教えられてはいない。病者に対する愛情の処方やエイズと癌告知、そのインホームド・コンセントやホスピスにおいて、医師はいかに患者さんを死なせるかの医療を教育しているだろうか。学校でも子供たちに自分の死に

ついて考えさせる授業がないように思う。私の受講生には機会があれば、一度火葬場に行き、葬式を済ませた死体がいかに肉親にみまもられながら、火葬になり、灰のまだ燃え上がっている骨が拾われるのかを見学すると良いと勧めている。

本書では、まさに死に直面した本人に「高貴なる生れの者よ(名前を言う)。歩むべき道を探しに行くときがとうとうやってきました。息が絶えたらすぐに、導師が示したとおり、根本の光明があなたの前に現われます。これこそ生命の根源を作っているダルマタ(本質・法性)です。ダルマタとは、宇宙のように広大で空虚で、光に満ちた空間、中心も境界もなく、純粹でありのままの心のことです。あなたはその心の状態を自覚し、その中に安らぎを見いだすのです。」と死を迎える者がその呼吸を止めるまで、耳元で何度も繰り返し唱える。

(なかい かん:教育学部教授)
(配置場所: 3階開架 180.9 Tib)

『24人のビリー・ミリガン』

—飛散した人格達が訴えている何か—

中 村 勝 人

まず、頭の中である情景を組み立ててほしい。…薄暗い部屋、その中心にスポットライトの光、1人がスポットライトのあたるところに、それを取り囲むようにして23の人間がいる…。これはビリー・ミリガンという実在する人間が、自分の心の構造を説明したものである。表題の本は、多重人格者であるビリー・ミリガン氏に関するきわめて詳細な記録である。

この本を読み始めると、23の人格の多様性のすさまじさに強烈な衝撃を受けることになる。ミリガン氏の中にある(本人を含めて)24ある人格は、それぞれ、見事に独立した人間であり、別々の名前を持ち、年齢、国籍、性格、興味の対象などあらゆる点が異なっている。それでは、外見上のミリガン氏の人格はどうなっているのか?それは前記したスポットライトに当たっているある1人の人格が(その時の)ミリガン氏となるわけである。

このように、紹介にはかなりの前置きが必要となるのだが、本の内容は犯罪者として逮捕されたミリ

ガン氏が多重人格者であることが判明する経過、裁判前後でのミリガン氏および彼を取り巻く周囲の変化であり、それらがまるで良くできたテレビドラマのように目の前で繰り広げられる。

心理学や医学の知識の乏しい私にとって、当初は『多重人格への好奇心』がこの本を読む原動力であった。確かに、その好奇心は満足したのだが、同時にそれが取るにたらないことであり、本質は全く別なところにあることを思い知らされた。それが何なのか…自分なりの結論は今だに混沌としているが、著者は読者に向けて次のように記すことでスタートラインを示している。「幼児虐待の犠牲者たち、とりわけ、隠れた犠牲者たちへ…」

続編はすでに発売されているのだが、手にするのはもう少し時間をおいてからにしようと思う。

書名: 24人のビリー・ミリガン (早川書房)

ダニエル・キイス・著 堀内静子・訳

(なかむら かつひと:教養部講師)

(配置場所: 3階開架 936 Key)

学内LANを利用したMEDLINEの研究室からの接続と利用方法

広瀬健二・江崎孝行

平成5年度に構築された学内LAN(Local Area Network)を利用して、附属図書館医学部分館内の医学文献データベースMEDLINEが利用できるようになりました。各研究室からLANを利用してMEDLINEを利用する方法を簡単に紹介いたします。

1 研究室からの接続方法

MEDLINEを利用するためには、まず、教室内のパソコンをLANに接続しなくてはなりません。各講義の廊下にはイーサネットケーブルが配線してあります。このイーサネットケーブルに教室のパソコンを接続します。このイーサネットケーブルには講座ごとにトランシーバが接続してあります。その4つの端子から直接パソコンに接続すると4台しか接続できません。しかし、将来は台数を増やし、4台以上接続する予定であれば、HUBという装置が必要になります。接続用の端子からHUBに接続すると1つのHUBで8台の端末機が接続できるようになります。また、パソコン側にはLANボードが必要です。最近ではLANボードを標準で内蔵している機種も多くなりました。LANボードを購入する際には各々のパソコンに適したLANボードを購入しなくてはなりません。パソコンとの接続方法には様々な種類があり、各教室の環境に適した接続方法を探ることが必要です。詳しい接続方法については成書に譲ります。さらに、パソコンをLANに接続するためのソフトが必要です。通信プロトコルといわれるTCP/IP(有料)というソフトが必要です。これは各機種、LANボードに対応したものがが必要です。その他に、telnet, ftpも必要です。これらのソフトにはフリーウェアといって無料でだれでも利用することができるものがあります。次に、図書館にMEDLINEの利用を申し込みログイン名とパスワードを登録してもらいます。

2 MEDLINEへの接続

教室のパソコンからtelnetを起動し接続先をMEDLINEのサーバのIPアドレス133.66.34.3を入力します。接続すると“login”という画面がでますので、自分のログイン名を入力し、次にパスワードを入力しますとMEDLINEが自動的に起動します。情報処理センターのワークステーションを経由して利用される方はIPアドレスを入力せずmedlibraと入力しても接続できます。

3 検索結果のダウンロード及びプリントアウト

検索結果はE-mail, FTP, Screen Capture, Kermitによってダウンロードすることができます。これはMEDLINEの中のsave optionの中で選択が可能です。FTPがもっとも一般的なダウンロードの方法です。MEDLINEの中で転送先のIPアドレスを入力すると直接端末までファイルを転送できます。ダウンロードした

ファイルは一般のワープロソフトで読み込んで印刷することができます。これがうまくいかない場合はE-mail, Kermit, Screen Captureを利用することもできます。同じ学内ですので1, 2分でメールは配達されます。そのメールをエディターで読み込むか、カット&ペーストで別のファイルにコピーすると印刷することができます。このE-mailの利用には情報処理センターへ利用申請書を提出しE-mailのアドレスをもらう必要があります。学内LANを通して接続した場合、MEDLINEで検索中にプリントのコマンドを実行してもリモート側の端末に接続したプリンターに印刷することは不可能なことがあります。これは個々の端末の置かれた状態に依存します。

4 検索結果の整理

私たちの教室では検索結果はEND NOTE PLUSに取り込んで整理しています。END NOTE PLUSは文献整理用のソフトウェアで論文の最後につけるReferenceをジャーナルに適したフォーマットに自動的に変換してくれます。MEDLINEからダウンロードしたテキストファイルを直接END NOTE PLUSに読み込むことが可能です(ENLINKが必要です)。個々の文献の著者名、ジャーナル名、タイトル、ページ、年代、アブストラクトなどを自動的に認識して項目ごとに整理してくれます。このEND NOTE PLUSに文献を整理しておくと論文を書くときにReferenceの作成に大変役立ちます。

5 Macintosh

MacではMActCPとNCSA Telnetで必要な機能がほぼ完全に動作することを確認しています。

6 IBM互換機

Windows NTはTCP/IPなどネットワークに関連したソフトが含まれるためそのみでLANに接続可能です。FTPによるファイルの転送、検索中の印刷など全ての機能が動作します。Windows 3.1ではTCP/IP, telnetを別に購入することでLANに接続しファイルの転送、検索中のプリントなど全ての機能が動作します。

7 NEC PC-9800

MS-DOS上でCenterNET PC/TCPという通信ソフトを使用してLANに接続が可能です。medlibraからFTPによるファイルの転送は、今のところ成功していない方もあるようですが、Screen Captureでファイルに落とすことができます。FTPが使えるか否かはおそらくソフトに依存するものと考えられます。CONTEC社のTCP/IP LAN-PACではfrp, Screen Captureなどの機能が使えないとの報告もあります。

(ひろせ けんじ:医学部大学院生)

(えざき たかゆき:医学部教授)

図書館員から一言

岡田 則子



綺麗な仕事だという認識で始まった時から、私の閲覧係での本との戦いが、始まりました。返却されて来た本を、書架の所定の位置に戻します。図書の返却、貸出、学外者の受付等で、一日中、四方八方に走り回り目が回る一歩手前の毎日です。お陰でただでさえ、細身な体が、ますますスリムになって、やせたい方、でもどうしてもやせられない方、現在ダイエットをなさっている方にお奨めの運動量です。書架を見ていて目につくのは、本が上下逆さになっていたり、倒れていたり、はたまた飛んでいたり、分類順に整理し並べて、すっきり気分然しそれをつかの間、本乱されて、乙女心乱される。利用者の皆様本を元の位置に戻されるように、ご協力を。(おかだ のりこ：情報サービス課閲覧係)

波多江 貴子



雨ニモマケズ／風ニモマケズ／雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ(しばしば冷暖房が切れるので)／丈夫ナカラダヲモチ／語学力ガアリ／ロシア語ヤスペイン語ノ本ヲ前ニシテモ／決シテ動揺セズ／イツモシズカニワラツテキル／一日ニブックトラック一台分ノ本ヲ処理シ／一年ニ一度ハ海外旅行ニ行キ・・・

ありがちではありますが、洋書目録担当の心情をうたってみました。コウイフ図書館員になるべく、一階の事務室のロッカーの陰で、日夜、精進しております。

(はたえ たかこ：情報管理課目録情報係)



お 知 ら せ

●時間外開館の延長等について

8月25日(木)から下記のとおり変更になりましたのでお知らせします。

開館時間

月曜日(本館) 22:00まで延長

土曜日(本館) 12:00～16:00に変更

(分館) 13:00～17:00に変更

なお、土曜日に、貸出・返却、OPAC検索が利用できるようになりました。

おって、休館日については、図書館の案内・掲示に注意して下さい。

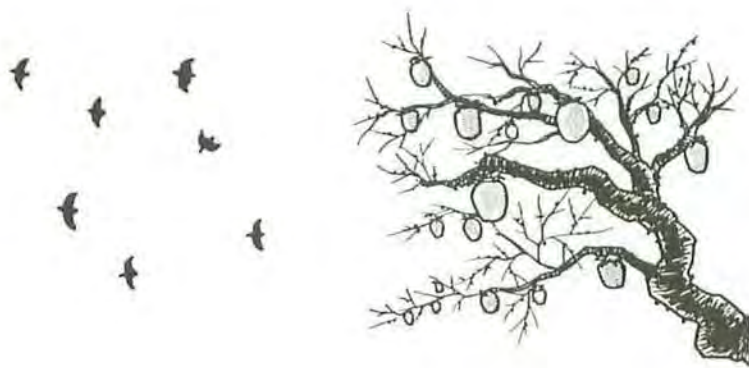
●スリッパの廃止について

10月3日(月)からスリッパを廃止し、靴履きのままで入館できるようになりました。

●MEDLINEネットワーク検索システム説明会の開催について

司町キャンパスでの説明会に続き柳戸キャンパスにおいて8月23日(火)午前と午後の2回、情報処理センター教育端末室で開催しました。合計約120名の参加がありました。

なお、司町キャンパスでの説明会を再度行う予定にしています。



岐阜大学附属図書館報「寸胴」第14号 1994年10月31日

編 集 委員長：梶山雅史 委員：小川克正、吉見直己、山口七郎、森 生也、小林かず子
上口正昭

発 行 岐阜大学附属図書館

〒501-11 岐阜市柳戸1番1 電話058-230-1111